筑波大学　地域研究26：185-203，2006　　Area Studies Tsukuba 26：185-203，2006

中国人日本語学習者による漢語の意味習得

―日中同形語を対象に―

李　　愛　華*

Concerning the issue that many words in Japanese share some likeness in form with Chinese words, some people hold the idea that to learn Japanese is much easier than other languages for the Chinese but others point out that this is just the cause that leads to confusion. The latter proved that among these words, some have the same meaning with the corresponding Chinese words but there are also some words which are with partially or totally different meaning from their meaning in Chinese. Through handing out questionnaires on this issue. I write this essay to analyse the difficulty and easiness in learning these words existed both in Japanese and Chinese to explain the main reason for such problems. The result shows that as influenced by their mother language most Japanese learners in China are inclined to judge the meaning of Japanese words by referring to their mother language. As a result, it is easier to master these Japanese words which are with the same form and meaning with Chinese words whereas other types of form-liking words are liable to be confused.

1．はじめに

外国語学習において，母語の知識が活用できれば，何も分からない状態からの学習に比べて，外国語の習得が促進されることは言うまでもない。勿論，これは日本語教育においても同様である。中国語には，「政治」「文化」のように日本語と同じ漢字によって表記される「日中同形語」が数多く存在するため，中国人学習者はしばしば母語である中国語の漢字の知識を利用して，日本語の漢字語彙を理解し，使用することができる。しかし，日中両国語の漢字の意味・用法は，長い歴史の経過の中である程度異なったものになってしまっている。同じ漢字で書かれていても、日本語としての意味と中国語としての意味が常に同じだとは限らない。中国人学習者が日本語を学習する際，辞書も引かず，常に自分の持っている中国語の漢字知識のみに基づいて，日本語の漢語を理解し，使おうとすると，意味・用法が全く同じ漢語を習得するためには負担が軽くなるが，異なる意味・用法を持つ漢語については，注意を払う必要があることを忘れる傾向にある。そこで，中国人日本語学習者のために，同じ漢字を用いているという利点を生かしつつ，誤りやすい点と注意すべき点を明らかにする必要がある。

＊　筑波大学大学院地域研究研究科日本語研究コース2005年度修了生「現在淮海工学院外文系」

2．先行研究の検討及び本研究の位置づけ

2．1　日中の漢語および同形語に関する先行研究

日中の漢語および同形語に関する先行研究は，主に対照研究，誤用分析という2つの観点から行なわれてきた。

2．1．1　対照研究

日中間の漢語を様々なタイプに分類し，一つ一つの漢語の意味範囲や用法の違いなどを究明する代表的な研究には，『中国語と対応する漢語』（文化庁 1978）がある。日本語教育において初・中級の段階によく出てくる漢語1882語を取り出し，『現代日中辞典』（光生館）と『現代中日辞典』増訂版（光生館）の両方で意味を調べ，比較した。その結果は，以下のように「S」,「O」,「D」,「N」の4種類に分類されている。

S（Same）：日中両国語における意味が同じか，または，きわめて近いもの。
O（Overlap）：日中両国語における意味が一部重なっているが，両者の間にずれのあるもの。
D（Different）：日本語と中国語において，意味が著しく異なるもの。
N（Nothing）：日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの。

文化庁（1978）が出版されて以来，これらの各グループに属する語が適当かどうかについて，様々な批判もあったが，その分類自体は同形語を見分ける際の便宜的なものとして認められている。この分類に基づき，武部（1979）は，中級教科書の一つの課に出てきた漢語を取り出し，分類した結果，150語の中に，「S」が108語（70%），「N」が31語（20%），「O」と「D」が合わせて11語（8%）あった。武部（1979）によると，すべての漢語はこの4種類に分けることが可能であり，「S」に分類される語について漢字圏学習者は正しく理解することができ，教える立場からも問題がないが，「N」に分類される語は中国語としては理解できない。中級段階で「O」と「D」に分類される語には誤解が生じやすいので，教える際は注意すべきであると述べている。

張（1987）は文化庁の4分類に従い，『漢日辞典　初版』（吉林省人民出版社，1982年）と『広辞苑　第二版補訂版』（岩波書店，1980年）から表記が共通する漢語1万1千語を抜き出し，比較対照したが，「S」,「O」,「D」,「N」の割合については明記しなかった。

三浦（1984）は，文化庁（1978）の4分類の「O」と「D」に相当する日中同形語1063語を取り出し、それぞれの意味範囲を比較した。その結果，以下の4つのグループに分類された。

1）意味がかなり又は非常に違う単語（D類に属すると思われる）
2）意味がある程度重複しているが，日本語には中国語にない意味があり中国語には日本語にない意味がある単語（O類に属すると思われる）
3）意味がある程度重複しているが，日本語の方が意味範囲が広い単語（O類に属すると思われる）
4）意味がある程度重複しているが，中国語の方が意味範囲が広い単語（O類に属すると思われる）

上野・魯（1995）は「日中同形語は全体から見ると，大きく二種類に分けることができる。一つは日中同形同義語で，もう一つは日中同形異義語である。」と述べ，同形異義語を300語取り上げ，日中の意味を比較して一冊の本にまとめたものである。比較の結果は，以下のような3グループに分類されている。

1）意味・用法の異なる同形語　　（D類に属すると思われる）
2）意味・用法の近似している同形語　（S類に属すると思われる）
3）意味の一部分が共通である同形語　（O類に属すると思われる）

また，意味の一部分が共通である同形語を，意味の重なり具合によってさらに「日本語に他の意味がある同形語」，「中国語に他の意味がある同形語」と「日中両言語とも他の意味がある同形語」という3タイプに下位分類した。

2．1．2　誤用分析

いわゆる誤用分析というものには，日本語と中国語の漢語の違いによる意味・用法の誤りを集めて，多くの誤用例を一つずつ対照的に分析する，すなわちケーススタディー形式で分析するものが多く見られる。菱沼（1980）では，漢字，漢語を媒介とするか，しないかという観点から中国人日本語学習者の誤用例を取り上げながら，母語の干渉を論じている。漢字，漢語を媒介しないものは本論の目的ではないため，ここでは取り上げないが，漢語を媒介する場合の同形語の誤用を挙げてみよう。例えば，「＊私は工場に分配された」，「＊最近は仕事が緊張です」などである。この場合，学習者は＜分配＞を「配属する，仕事を割り当てる」，＜緊張＞を「忙しい」という意味で使用している。菱沼によると，これは，中国語を母語とする日本語学習者が母語に影響され，ある語を中国語の意味で日本語の文中に使ってしまった誤用例であると述べている。

淡島（1987a・1987b）は中国系（台湾を含む）日本語専攻の大学生が書いた作文を収集し，その中の漢字語彙（音読み語のみ）の誤用を約240例選出し，誤用の原因を分析した結果，「中国語表現，日本語表現ともにある」の誤用例は約58%（141例），「中国語表現はあるが，日本語表現はない」の誤用例は約26%（62例）を占めている。すなわち，母語である中国語による誤用例が全体の94%を占めている。この分析により，中国系日本語学習者の漢語誤用は母語の中国語と非常に深い関係があることが明らかになった。

内田（1992）では，留学生の中級レベルの作文をもとに，その語彙・意味に関わる誤用の主な傾向を分析した。中国人日本語学習者にしばしば見られる誤用例を幾つか示し，「＊～に<u>趣味</u>がある。」（興味があるという意味），「＊学生たちの性格や気持ちを<u>了解</u>する。」（理解するという意味）のような誤用の原因は「母語転移」という現象で説明されると述べている。そして，日本語教育の現場において，学習者が誤りやすいところを意識しながら教授すべきであると指摘している。

2．2　先行研究の問題点

日中の漢語に関する先行研究については，主として以下の三つの問題点が指摘できる。

1）言語上の相違点と学習上の問題点について実証した研究が十分とは言えない。

文化庁（1978）以来，日中の同形漢語の分離および対照研究が盛んになり，それに基づいた辞書も数多く見られる。それらの研究から，学習者の目標言語である日本語の漢語と母語の中国語で，類似するもの･異なるものの分類が明らかになった。そして，個々の漢語を挙げ，日中で意味の違いや意味範囲の異なりなどを明らかにする研究は，中国語母語話者が日本語の漢語を学習する際，どのようなものが難しいのかといった難易度の予測に役に立つ。しかしながら，実際にそれらを学習する際にどのような問題があるかが検証されなければ，必ずしもその難易度の予測が正しいものであるかどうかは分からない。

その上，管見の限りでは，このような研究はまだ量的にも質的にも十分であるとは言えない。陳（2003）は，日中間の漢語の難易度を検証するために，漢語を同義語・類義語・異義語・脱落語の4タイプ[1]に分けて，台湾人日本語学習者を対象に質問紙を用いた調査を実施した。調査の結果，類義語と異義語の数は同義語と脱落語より少なかったにもかかわらず，学習者にとって難易度が高いという結果が出たため，日中間での意味のずれをきちんと区別させることが大事であると指摘している。

しかしながら，単語一つだけで調査を行うという方法（例：地味⇒①故郷的味道　②地方的小吃　③朴素　④特色）については疑問を感じざるを得ない。なぜならば，漢語の習得研究では漢語は単語一つだけのものと取られやすいが，学習者の漢語の産出過程を見ると，単なる単語一つで産出されるのではなく，複合語や文というレベルで産出されている。例えば，「大型」という単語であるが，日本語の「大型機械」，「大型コンピュータ」などの複合語に対しては中国語でも「大型機械」，「大型計算機」と，「大型」がそのまま使えるが，日本語の「大型台風」は中国語では「強台風」になり，「大型」は使えないのである。一方，中国語の「大型文芸晩会」を日本語に訳すと，「盛大な演芸の夕べ」となり，「大型」は使いにくい。つまり，単語一つだけで正しく理解し，使用できても，複合語や文というレベルになると誤用が発生するという場合が考えられるのである。

2）誤用ばかりでなく正用といった正の転移にも注目する必要がある。

誤用分析は学習者の誤用しか見ていないため，漢語習得過程の全体像をとらえきれていないという批判がある（長友 1993）。従って，誤用と正用を同時に見ることにより，その両方の影響を検証しなくてはならない。また学習者の日本語能力との関係も見る必要がある。

3）中国語は一つではない。

一般には，中国と台湾は両方とも「中国語」を母語とするから，台湾人学習者を対象とした研究結果を中国の日本語学習者の誤用にも適用できると思われがちである。しかし，簡体字を使用する中国大陸の中国語と繁体字を使用する台湾の中国語は字体が異なるだけではなく，意味・用法が異なるものもある。例えば，「愛人」という漢語は，中国大陸では，「配偶者」という意味であるが，

1　それぞれ文化庁（1978）における「S」，「O」，「D」，「N」の4種類に当たると思われる。

台湾では，「不倫関係の相手」という意味になる。つまり，同じ漢字圏学習者であっても同じ漢語を見て，同じ意味を考えるとは限らないということが示唆されている。

2．3　本研究の位置づけ

漢語の研究においてこれまで行われてきた対照研究からは，日本語と中国語の異同が明らかになりつつある。また，学習者の誤りを集め，分析した誤用分析研究からは中国語を母語とする学習者の日本語の漢語習得において起こりやすい誤りも論じられてきた。しかし，学習者の誤りに焦点を当てるだけではなく，学習者が母語の影響を受けながら目標言語に達するまでの中間言語を見る研究は管見の限りではまだ十分とは言えない。習得過程のどの段階でどのような漢字語彙に母語の知識を利用して正の転移が起こるのか，或いは負の転移になってしまうのか，学習上どのような誤解が習得の妨げとなっているのかを明らかにする必要がある。

以上の問題を踏まえ，本研究では，中国人学習者の日本語の漢語習得の過程における負の転移と同時に正の転移の実態をも見るため，質問紙を用いた調査を行う。具体的には，「中国語の文に対する適切な日本語訳を選ぶという選択肢課題と，日本語の文に対する適切な中国語訳を選ぶという選択肢課題」（調査1，使用語彙43語）により，中国人日本語学習者がどのような種類の同形語を習得しやすく，どのような同形語が習得にくいのかを検討する。そして，「ある文の日本語が自然かどうかを判断させる課題」（調査2，使用語彙23語）により，学習者が日中の同形語で，意味的なずれがある場合の文の自然さを判断する時，母語の意味に頼って，類推で意味を取ろうとする傾向があるのかどうかを検証する。これらの調査を通じて，中国人日本語学習者にとってどのような種類の同形語が習得しやすく，どのような同形語が習得にくいかを明らかにし，日本語教育関係者にも，漢語学習を指導する上での留意点を提示することができるのではないかと考える。

3．調査の概要

3．1　「翻訳の選択肢課題」（調査1，使用語彙43語）

3．1．1　調査1の目的

中国人日本語学習者にとって，どのようなタイプの同形語が翻訳しやすく，どのような同形語が翻訳しにくいのか，その原因はどこにあるかを明らかにする。

3．1．2　調査1の協力者

中国の大学で日本語を専攻している学習者である。日本語の学習時間数によって2，3，4年生の順で学習レベルが低いと見なす。2年生（53人），3年生（52人），4年生（46人）の計151人である。

3．1．3　調査1の内容[2]

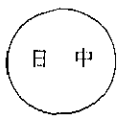
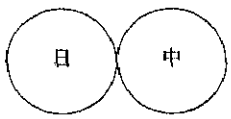
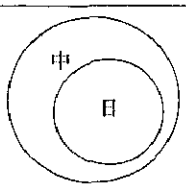
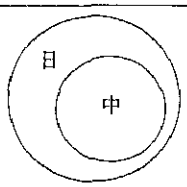
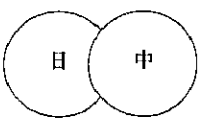
本研究で使用した質問紙における翻訳文は，日中・中日の対訳辞典・対応集・用例集などを参照して作成したが，本調査の前に日本の大学に在学している中国人日本語学習者28人を対象に，翻

2　詳しくは，添付資料1の調査資料一部をご参照されたい。

訳文の分かりやすさをみるための予備調査を実施した。その結果から，例文の難易度や各タイプのバランスが取れるように調整し，不適当な語9語を削除して，本調査の語彙66語を表1のように修正した。同形語43語を使用し，単一選択肢課題を作った。例文作成の便宜上のことを考慮し，2つのパターンを用意した。一つ目は中国語の文に対する適当な日本語訳を四つの選択肢の中から選ぶもの（中⇒日）であり，二つ目は日本語の文に対する適当な中国語訳を四つの選択肢から選ぶもの（日⇒中）である。

今回の調査では，中国の大学で日本語を専攻する学習者を対象とし，問題文理解への読解能力や文法能力などによる影響を考慮して，調査実施の時点で日本語学習歴18ヶ月以上の学習者に限定したため，調査語彙の抽出においては，中国で出版され，調査協力者に使用されている教科書『新編日語』，『日語』（全8冊）から同形語を選ぶことにした。

表1　本調査用語彙表（下線の付いた部分は調査2用語彙23語）

タイプの種別	対照図	調査語彙
「日＝中」 日本語と中国語の意味がほぼ同じもの		重要　特徴　歴史　経験 感謝　握手　景気　対立 流行　重視　供給　違反 従来
「日≠中」 日本語と中国語の意味が全く違うもの		看病　激動　階段　結構 用意　出産　検討　迷惑 夢中　用心　貧乏　暗算 無事
「日＜中」 中国語の意味範囲のほうが広いもの		簡単　関心　品質　出世 影響　検査　準備　地方 招待　最近　同情　解決 緊張　分配
「日＞中」 日本語の意味範囲のほうが広いもの		素材　必要　大事　風景 無理　普通　期待　演習 監督　処分　講師　性格 訪問　愛情
「日＜＝＞中」 両者は重なる意味もあり，ともに別の意味も持つもの		一定　単位　意見　把握 翻訳　得意　専門　質問 熱中　大家　新鮮　深刻

同形語は，両言語内における意味用法の相違によって，上記５つのタイプに分類した。ただし，本研究は語彙の意味分類に重点を置くものではなく，学習者がどのような種類の漢語において母語からの影響を受けやすいかをみることを研究目的とするため，分類作業の便宜上の原則として，先行研究二つ以上において分類が共通であれば，その分類を採用することにした。しかし，「処分」，「普通」，「講師」のように，先行研究「異義語 300」（1995）にしか掲載されていないような場合には，辞書の記述に従い，著者が分類の判断をおこなうことにした。

３．２「自然さ判断課題」（調査２，使用語彙 23 語）

３．２．１　調査２の目的

日中同形語で，意味的なずれがある場合の文の自然さを判断する時，中国人日本語学習者は，中国人母語話者が中国語の文の自然さを判断する場合や日本人母語話者が日本語の文の自然さを判断する場合と比べて，母語の意味に頼って類推で意味を取ろうとする傾向があるのかどうかについて明らかにする。

３．２．２　調査２の協力者

日本語学習者：3.1.2 で述べた調査協力者 151 人である。

日本人母語話者：日本人 30 名中，13 名が大学生，17 名が大学院生である。

中国人母語話者：在日中国人留学生 30 名であるが，日本語の学習歴については６ヶ月から４年まで幅がある。

３．２．３　調査２の内容[3]

質問紙は二枚からなっており，一枚目は５タイプの 23 項目からなる日本語文を提示し，その文が自然か不自然かの判断をしてもらうものである。日本語として自然な文は，日本語の意味に従って作成したのに対して，不自然な文の方は，中国語の意味に従って作成した。質問紙の項目の順序はランダムに配列されており，回答の方法は，「とても自然」，「やや自然」，「どちらともいえない」，「やや不自然」，「とても不自然」の５段階の評定法で，それぞれ１点から５点までに得点化した。

二枚目は日本語の自然さ評定課題を中国語に訳したものである。特に，意味的には，中国語から直訳できる言い方を多く用いた。項目順序も，回答方法も一枚目と同様である。日本語を専攻する中国人学習者を対象とした調査は集団で実施し，教室で配り，その場で回収した。一方，日本人母語話者と在日中国人母語話者を対象にした調査は個別に行い，後で回収する方法を取った。

４．調査の結果と分析

４．１「翻訳の選択肢課題」の結果と分析（調査１）

まず，「翻訳の選択肢課題」調査の全体的な結果について述べる。「翻訳の選択肢課題」は 43 問からなっており，正答率を計算すると，２年生の平均値は 63.02％，３年生は 67.68％，４年生は

3　詳しくは，添付資料２の調査資料一部をご参照されたい。

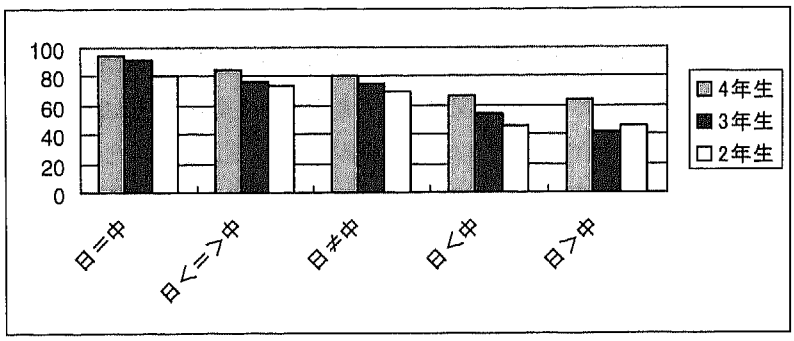


図1　翻訳の選択肢課題における各タイプの正答率（%）

表2　多重比較の結果 1)

左項VS右項	日≠中	日>中	日<中	日<=>中
日=中	9.9	33.7**	31.8**	6.9
日≠中		23.8**	21.9**	3.0
日>中			1.9	26.8**
日<中				24.9**

1) df (2, 151).　(**: p < .01)

表3　学年別の分散分析

タイプ	2．3．4年生（p < .005）
日=中	F (2, 151) = 6.3**
日<=>中	F (2, 151) = 4.67**
日≠中	F (2, 151) = 5.55**
日>中	F (2, 151) = 1.7
日<中	F (2, 151) = 0.01

78.01%であり，全体的な平均値は69.57%であった。そこで分散分析を用いて，3グループ間の差を検定した結果，3グループ間の差は有意でなかった（F (2, 6) = 4.03）。つまり，一見正答率は異なっているが，有意差を得なかったため，学習年数から同形語全体の習得状況を検証するまでには至らなかった。

両言語内における意味の相違によって分類された5タイプそれぞれについて調査協力者全体の正答率を計算した。その結果，正答率の高い順から「日=中」(88.78%) >「日<=>中」(78.01%) >「日≠中」(74.86%) >「日<中」(55.76%) >「日>中」(50.44%) となっている（図1を参照）。分散分析を用いて，5タイプ間の差を検定した結果，タイプ間の差が有意であった（F (4, 10) = 10.67, **p < .01）。

そして，Tukey法による多重比較を行った結果を表2に示す。「日=中」・「日≠中」・「日<=>中」3タイプの正答率が「日>中」と「日<中」より有意に大きいという結果が出た。

図1から分かるように，5タイプの同形語の習得において，先行研究で示された同形同義語「日=中」が最も易しいことが支持された。しかし，異義語「日≠中」の場合も，日本語の意味と中国語の意味が著しく異なるにもかかわらず，既習の場合，すぐ判断できるためにあまり難しくないことが示された。

一方，本研究では同形類義語を意味の重なり具合によってさらに「日本語に他の意味があるもの」，「中国語に他の意味があるもの」，「日中両言語とも他の意味があるもの」に下位分類した。図1から分かるように，同形類義語のうちで，「日<=>中」類の正答率が2番目となり比較的習得しや

すいのに対して，日本語と中国語とどちらか一方の意味が広いもの，つまり「日＞中」と「日＜中」の類は極めて難しく，学習年数が経っても容易に進んでいないことが分かった。特に中国語において日本語のような意味用法がない「日＞中」の場合，学習者がそれを容易に受け入れられない傾向があると言える。

さらに，各学年の正答率をタイプごとに分散分析を用いて分析した（表3を参照）。その結果，「日＜中」と「日＞中」以外の3タイプには有意差が見られた。この結果は，「日＜中」と「日＞中」の2タイプの漢語が中国人日本語学習者にとって大変難しく，学習の年数が経っても容易に習得できないことを示している。それとは対照的に，「日＝中」，「日＜＝＞中」と「日≠中」の3タイプの学習はそれほど困難でないこと，学習年数が経つにつれて学習が進むことが示されている。

次に，5タイプの同形語の難しさの原因を探るために，各タイプの習得の度合いを分析する。「日＝中」の場合，全員の正答率の平均は88.78%であり，5タイプの中で最も正答率が高く，そして，8問全体に関しては，2年生より3年生，3年生より4年生の方が正答率が高いという結果が得られた。学習者は，「日＝中」類のような漢語を母語である中国語と結び付け，中国語の漢語の意味と用法から類推して判断していると思われる。このような類推は「日＝中」類のような漢語の理解と使用に役立つので，正の転移と見なすことができるだろう。

「日＜＝＞中」の場合，8問の正答率は，最低の23.4%から最高の100%までかなり幅広い。今回の調査によると，正答率が78.01%であり，2位となっている。また，学年別に見ると，全ての語についてレベルが上がるにつれて正答率が高くなるわけではないが，全体の正答率ではレベルが上がると正答率が高くなるという現象が見られる。正答率の平均は70%を下回る語は1問「意見」のみであった。この類の同形語は共通点と相違点をはっきり分けることによって，弁別が可能になるため，日中双方の意味の一部が重なり，ほかの部分は対応しない語はそれほど難しくないと思われる。ところで，中国の大学で日本語の勉強をする学生は実際の日本語の言語生活からかなり離れた環境の中で勉強しており，しかも20年近く中国語を母国語としているため，学習者の持っている母語知識が一貫して強く第2言語の学習に影響し続けていることが裏付けられた。つまり，共通部分の学習があまり問題にはならないのに対して，相違部分の学習には母語からの干渉的影響が見られるということである。

「日≠中」の場合，今回の調査では，正答率が3位となっていたが，「日＝中」類と「日＜＝＞中」類との間に有意な差がみられなかったため，3タイプの難易度はほぼ同様ではないかと考えられる。9問の分析から分かるように，学習者が同形異義語「日≠中」類に出会った時，既習の場合であれば，その語が中国語と異なる意味を持つことをすぐに判断できる。しかし，その語彙について学習したことがない場合には，その語彙の意味について判断する手がかりがないため，母語の中国語に頼ることになる。従って，異義語の難しさというのは，異義語そのものが難しいのではなく，学習しているかどうかということに起因すると考えられる。また，一度学習しても身についていなければ再び母国語の影響を受け，同化現象を起こす可能性も考えられる。

「日＜中」の場合，今回の調査によると，正答率が55.76%であり，5つのタイプの中で4位となっていたため，中国人日本語学習者にとって習得するのが大変難しいものであると言える。どの段階

でもこの種類の漢語の誤用は依然として存在している，しかも学習レベルが上がっても，誤用率がほとんど変わらない漢語が存在する。また，「日＜中」類全体の結果から分かるように，正答率が低い漢語はいずれも中国でよく使われている語であるため，日本語への切り換えが難しく，中国語の意味や，漢字の持つ意味にとらわれた結果正答率が低くなっていると考えられる。あるいは，中国語の意味や用法でこれらの語を誤解したままである可能性がある。

「日＞中」の場合，全員の正答率の平均は50.44%であり，5つのタイプの中で最も正答率が低いことが既に述べられた。また，図1から分かるように，5つのタイプの中で「日＞中」類は，学習時間が長くなるにつれ学習効果が出るどころか，下がってしまうという結果が出た。学習者が「日＞中」類の漢語を学習した際に，ただ教科書に出てきた一種類の解釈だけを頼りにして辞書で他の意味を確認しなかったりすることによって，正答率が低くなってしまったのではないだろうか。そのため，学習者が中国語での意味の方に固執すると，その中国語の文を正しく日本語に訳すことができなくなり，誤用が出やすくなると考えられる。

4．2 「自然さ判断課題」の結果と分析（調査2，使用語彙23語）

4．1の「翻訳の選択肢課題」における5タイプの分類とは別に，調査2では，同形語を「両言語で自然」・「日本語で自然」・「中国語で自然」という3つのカテゴリーに分け，統計的な処理をおこなった。「自然さ判断課題」は，「日本語の自然さ判断課題」と「中国語の自然さ判断課題」という2つの部分からなっている。「日本語の自然さ判断課題」における調査協力者は，調査1における中国で日本語を専攻する学習者2年生，3年生，4年生の3グループと日本人母語話者30名である。「中国語の自然さ判断課題」における調査協力者は在日中国人留学生30名である。

4．2．1 日本語の自然さ判断

日本語の自然さ判断課題では，日本人母語話者の評定平均値との差が1.95を越えるとエラーとされる[4]。日本語学習者の各グループのエラー率を図2に示した。

図2から分かるように，学習年数の一番長い4年生は一番エラー率が低かった。グループ間の差を検定したところ，グループ間の差が有意であった（$F(2, 151) = 23.6$，$p < .01$）。Tukey法による多重比較の結果，3つのグループの間に，それぞれ有意差（$p < .01$）が見られた。これは，学習年数が経つにつれて学習が進むこと，学習エラーが減少していくことを示している。

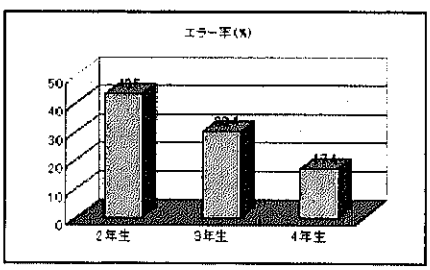


図2 各グループのエラー率

しかし，中国人日本語学習者は，日本語の自然さ判断課題のどういった項目で少なく，どういった項目で多くエラーを出すのであろうか。それを検討するために，日本語の自然さ判断課題23項

4 差が2を越えると，日本人と反対の傾向となるため。

目を3つのカテゴリーに分けて，学年ごとのエラー率を集計，計算したエラー率を表4に示した。

表4　日本語の自然さ評定課題におけるエラー率（%）

内容	2年生	3年生	4年生
両言語自然	10.0%	0%	0%
共通項目	10.0%	0%	0%
日本語自然	42.9%	42.9%	28.6%
中国語自然	100%	66.7%	33.3%
相違項目	69.2%	53.8%	30.8%

表4から明らかなように，学習年数の如何を問わず，共通項目より相違項目の方が学習の困難度が高いことが分かった。つまり，第2言語の母語と共通部分の学習には，母語による促進的効果があり，相違部分の学習には干渉的効果があることが考えられる。また，いずれのグループにも，相違項目のうち，日本語としては自然であるが中国語としては不自然である項目より，中国語としては自然であるが日本語としては不自然な項目において中国人がエラーを多く出す傾向がある。つまり，日本語では不自然であっても母語で自然であれば，中国人学習者はそれを不自然だと感じない傾向が確認されたと言える。

ここから示唆されるのは，中国人学習者が日本語の漢語を学習する際，中国語の意味・用法を学習方略として使用するということである。つまり，中国人学習者が日本語の漢語を学習する際，目の前の漢語だけを頼りにして学習を進めているのではなく，漢語を手がかりに，記憶内の母語での関連情報を活性化させながら学習を進めているということであろう。さらに言えば，日本語の漢語それ自体ではなく，記憶内の関連情報，すなわち母語の漢語知識が第2言語の学習において決定的な役割を果たしている可能性が高い。玉岡（1998）は「中国語系の日本語学習者については，母語である中国語ですでに漢字の表象群が完成しているので，新しく学習する日本語の漢字の意味・書字・音韻表象群において言語を越えて結合関係が生まれるため，干渉現象が起こることは容易に予測できる。」と指摘している。しかし，日本語の漢字漢語の学習に非常に苦労している非漢字圏学習者について，玉岡（1998）は以下のような観点を述べている。

非漢字圏日本語学習者は，もともと漢字の知識が存在しないので，そうした干渉は考えられず，適切なネットワークの形成を促進するような漢字の学習過程を構築することが，そのまま日本語の漢字及びその複合語を効率的に習得する方法となろう。

一言で言えば，非漢字圏の日本語学習者は日本語の漢字知識しか持っていないため，日本語の漢字・漢語を運用する際に，日本語の漢字知識しか使用できない。しかし，中国人日本語学習者の頭の中には中国語の漢字知識と日本語の漢字知識が両方とも存在しており，その上，両言語の漢字知識の間に明確な境界線がないため，日本語の漢字・漢語を使用する際に中国語の漢字・漢語知識からの影響（干渉）が起こり，誤用してしまうと考えられる。

次に，日本語の自然さ判断課題における10の共通項目と13の相違項目とを分けて，中国人日本語学習者の各学年と日本人母語話者との評定平均値の相関係数を求めた。その結果，共通項目では，2年生において0.39（$p < .001$），3年生において0.77（$p < .001$），4年生において0.82（$p < .001$）となり，いずれの学年も，日本人母語話者と正の相関が得られた。共通項目と対照的に，両言語の相違項目においては，2年生で－0.52（$p < .001$），3年生で－0.34（$p < .001$），4年生で－0.32（$p < .001$）という結果であり，いずれの学年も，日本人母語話者と負の相関を出している。したがっ

て，中国人日本語学習者が日本語の自然さを判断する際，両言語の共通項目においては日本人と類似する傾向，相違項目においては異なる傾向があると言える。

4．2．2 中国語の自然さ判断

上で考察したように，両言語の相違項目において，日本語学習者がエラーを多く出したこと，および日本人母語話者の評定値と負の相関を出したことは，果たして両方とも母語干渉の影響に起因するものなのであろうか。中国人日本語学習者が漢語を学習する際，もしも母語（中国語）から影響を受けるのであれば，そして，もしもこの母語の影響が非常に根強いものであるならば，次のことが考えられる。日本語の自然さを判断する時，中国人学習者は日本語よりも，むしろその日本語と対応する中国語の自然さを基準にするのではないかということである。この点を明らかにするために，5.2の日本語の自然さ判断課題を中国語に訳して，在日中国人留学生に評定してもらった。

4.2.1における日本語の自然さ判断課題結果と比較した結果は以下のとおりである。まず，共通項目と相違項目のそれぞれにおける日本人母語話者の評定平均値と中国人在日留学生の評定平均値との得点の差を求めた。10の共通項目の差が0.00から0.78まで不等であるが，そのうち，差が0.35以下の項目は7あり，各項目における得点の差の平均値は0.36である。ゆえに，この10項目は両言語の共通項目であると考えてよいであろう。一方，13の相違項目のうち，差が2.00から3.83までであり，しかも差の平均値も2.95に達したことから，この13項目は相違項目とみなしてよいと思われる。したがって，差の結果から上記の予想が正しいことが明らかになった。

一方，共通項目と相違項目について，それぞれ日本人母語話者と中国人母語話者の評定平均値の相関係数を求めた。その結果，共通項目では0.89（$p < .01$）と有意でかつ高い正相関が得られたのに対して，相違項目では－0.80（$p < .01$）と高い負の相関が得られた。したがって，相関係数よりも，両言語の共通項目においては在日中国人留学生の中国語への評定平均値と日本人母語話者

表5　3つのカテゴリーにおける各グループの評定平均値（標準偏差）1)

	GJ	G2	G3	G4	GC2)
両言語自然	1.35（0.22）	2.25（0.62）	2.39（0.47）	2.05（0.44）	1.27（0.61）
日本語自然	1.67（0.21）	3.07（0.91）	3.04（1.03）	3.14（0.83）	4.38（0.67）
中国語自然	4.44（0.39）	2.17（0.23）	2.55（0.18）	2.97（0.22）	1.22（0.41）

1）5点尺度（1：自然，2：やや自然，3：どちらともいえない，4：やや自然，5：とても自然）
2）GJ：日本人母語話者　G2：2年生　G3：3年生　G4：4年生　GC：在日中国人留学生

表6　3つのカテゴリーにおける各グループ間の評定値の検定結果 1)

	F	GJG2	GJG3	GJG4	GJGC	G2G3	G2G4	G2GC	G3G4	G3GC	G4GC2)
両言語自然	13.4**										
日本語自然	1.05	*	*	*	*						
中国語自然	28.9**	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

1）df（4，211）．　（*：$p < .05$，**：$p < .01$）
2）GJ：日本人母語話者　G2：2年生　G3：3年生　G4：4年生　GC：在日中国人留学生

の日本語への評定平均値が有意に類似し，相違項目では有意に異なっていることが分かった。この結果からも，予想が改めて正しいものであると確認されただけではなく，日本語の自然さ判断課題における各項目が日中両言語の相違項目と共通項目から構成されていることも検証された。

さらに，中国人日本語学習者の評定値が日本人のそれに近いか，それとも対応する中国語への中国人のそれに近いかを検討するために，両言語で自然，日本語で自然，中国語で自然の３つのカテゴリーにおける５つのグループの評定平均値を比較した。５つのグループとは，調査１の対象である中国人日本語学習者３つのグループと調査２の在日中国人留学生及び日本人母語話者である。まず各カテゴリーにおける各グループの評定平均値と標準偏差を表５に示した。

表６から明らかであるように，「両言語で自然」においては，予想通り，５つのグループ間の差は小さく，有意ではなかった。つまり，中国人が日本語の自然さを評定する際，両言語の共通項目においては日本人母語話者と類似する傾向が窺える。一方，「日本語で自然」と「中国語で自然」のどちらにも，中国人の４つのグループと日本人母語話者との間に有意差が見られた。これにより，２つのことが言える。１つは中国人の４つのグループとも日本人と有意に異なった評定値をつけたということであり，１つは「日本語で自然」も「中国語で自然」も，両言語の相違項目からなっているということである。つまり，日本語の自然さ判断において，中国人日本語学習者は日本語の意味・用法には従いにくいということが言えるのではないであろうか。

また，「日本語で自然」において，日本語学習者３つのグループ間に有意差がなかったことに対して，「中国語で自然」においては有意差が見られた。ここから示唆されるのは，母語で自然な文は，第２言語で不自然な文となっていたとしても，学習者がそのことを容易に学習できない傾向にあるということである。つまり，第２言語では不自然な文を自然な文として受け入れてしまう可能性があり，そして，学習が進むにつれて，負のフィードバックが得られることによって，徐々にそれが不自然だと分かってくるのではないかと考えられる。逆に，母語で不自然な文が，第２言語では自然となる場合，その差異には比較的気づきやすいことが示唆されているのではないか。ゆえに，日本語の自然さと比べ，中国語では自然なのに日本語で不自然な場合の方がより学習しにくいことが重ねて確認された。もちろん，わずかな項目とわずかな人数により結論を下すことはできない。この点に関する詳しい検討は今後の研究に譲る。

しかし，「中国語で自然」な文において，日本語学習者３つのグループが，在日中国人留学生とも有意差を示したことは予想外のことであった。この原因については２つのことが考えられる。すなわち，

1）表５から明らかであるように，標準偏差が小さかったため，差が有意になりやすいこと，
2）第２言語の自然さ判断において，母語でないために母語と異なるだろうという発想が働いていることである。この点については調査１でも明らかにされていた。

ここで強調したいのは，「中国語で自然」と「日本語で自然」において，中国人母語話者と日本人母語話者との評定値に差が出たことである。これによりこの２つのカテゴリーが両言語の相違性

を反映する項目からなることが実証された。これはこの調査において非常に重要な意味を持っている。なぜなら，これが実証できない限り，中国人日本語学習者が両言語の相違項目において，日本人母語話者と異なる傾向を示すことも，エラーを多く出すことも，真の意味においては，実証できたとは言えないからである。

5．結論および今後の課題

5．1　本研究の結果のまとめ

今回の「翻訳の選択肢課題」および「自然さ判断課題」による調査の結果と考察から次のような結論が得られた。

1．調査1では，同形語を両言語内における意味の相違によって5つのタイプに分類し，中国人日本語学習者はどのようなタイプの同形語を習得しやすいのか，また，その原因はどこにあるかを中心に検討し，以下の結果が得られた。

中国人日本語学習者が日中同形語を学習する際，学習年数が経つにつれ，学習は進んでいくとはいえ，完全にマスターできるとは限らない。今回の調査における習得の度合いと学習効果の顕著さに基づき，5タイプの同形語には，以下のように誤用されにくいものと誤用されやすいものがあることが分かった。

1）誤用されにくい同形語

「日＝中」類（日本語と中国語の意味がほぼ同じもの），「日＜＝＞中」類（日本語と中国語ともに別の意味を持つもの），「日≠中」類（日本語と中国語の意味が全く違う）である。今回の調査の結果では，この三種類の正答率は高かったため，これらは学習者にとってそれほど困難ではないことが示された。そして，学習年数が経つにつれて学習が進んでいくことが明らかになった。

2）誤用されやすい同形語

「日＜中」類（中国語の意味範囲のほうが広いもの），「日＞中」類（日本語の意味範囲のほうが広いもの）である。どの段階でもこの種類の同形語の誤用は依然として存在する。しかも学習レベルが上がっても，誤用率はほとんど変わらない。

2．調査2では，中国人日本語学習者の日本語の自然さ判断課題における母語の影響を中心に検討した。それにより，中国人日本語学習者は同形語の学習において，日本語の意味よりも自らの中国語の意味に従いながら日本語を学習している傾向が見られた。また，同形語の意味・用法上の相違は，どのような場合であっても様々な形で母語の影響を受け，日本語の判断の基準にその言葉の中国語の意味を持ち出し，日本語で使用できるかどうかという判断を中国語のその言葉の意味により行なってしまうという母語の影響が存在することが分かった。

5．2　中国における日本語教育への応用と提案

今回の調査によって，不完全ながらも中国人日本語学習者の漢語習得の現状をとらえることができた。最後に，上記の結論を踏まえて中国人日本語学習者のための教科書，中日辞書，教師および学習者の指導・学習の態度，という３つの観点から中国における日本語教育への提案を試みる。

まず，教科書についてであるが，中国の大学の日本語の授業で使われている教科書は，一般的に１年生の初級日本語から２年生の中級日本語に至るまで，大部分の漢字・漢語に振り仮名が付いていて，辞書を引かなくても済むようになっている。そのため，学習者は目で漢語の意味を確認するだけであったり，中国語の知識に頼っていい加減に意味を取ったりする可能性が高く，知らない漢語を辞書で引いて意味・用法をつかむ，理解するという作業をしないで済ませる傾向がある。このような編集方針は，学習者を誤用へと導く危険をはらんでいるのではないだろうか。前述のように，一対一の訳語を与える方法は，外国語学習に初期の段階から悪い影響を与える恐れがある。特に日中同形語の場合，「関心（日）＝関心（中）」というような列記は学習者を負の転移へと導いてしまう可能性が大きい。したがって，学習者が日本語の漢語の概念を形成する前に，意味や共起関係，用法という視点から日中両言語の対照関係がどのようになっているかということを予め提示する必要があると思われる。例えば，「最近」という漢語は日中両言語には存在するが，中国語の単語の方が意味・用法が比較的広いことに注意させるべきである。あるいは，日中両言語の基本となる意味としては，「比較的近い過去から現在に至るまでの時間」を指しているが，「これから先の時間」という意味は中国語にしかないと教えるなどの方法が考えられる。このような方法の他に，誤用しやすい漢語の後ろに中国語の使用例との比較を加えるなどすれば，学習者にとって分かりやすくなり，誤用の割合を下げることができるだろう。

次に辞書についてである。中国では，１年生の初級日本語から２年生の中級日本語に至るまで，学習者はほとんど中国国内で出版されている日漢辞典を利用している。３・４年生になってからは国語辞典が広く使われている。日漢辞典には漢語の意味と少数の例が収録されているため，初級の学習者には欠かせないものである。しかしながら，現行の日漢辞典のほとんどは中国語版の日本語教科書と同様に，漢語に一対一の訳語しか与えられておらず，類義語と使用上の相違を比較するどころか，中国語の意味との対照を理解することさえも困難である。また，国語辞典について浅野（1987）は，「日本語を外国語として学ぶ人々のための本格的な辞書は残念ながら現在まだない。･･･ある程度の漢字の知識があって，一般の国語辞典が使用できる場合でも，例えば，ある語とある語の意味の違いを辞書で調べようとしても，互いに他の語に置き換えて意味の説明をしている国語辞典が多いのが現状なので，意味の違いを辞書から学び取ることは困難である。」と述べている。この他に，一般の国語辞典は各言葉の意味をその語の用法と関係づけて説明しているため，その解釈は語義にとどまり，その語の正しい使い方までは詳しく解説されていないことが多い。そこで，辞典の記述による語義記述から言葉の意味用法を理解して文を作ると，自然な日本語にならないことがある。このような事態を防ぐために，授業を担当する教師は，前もって教科書の中にある漢語に該当する中国語の単語があるかどうかを検討し，比較・対照しながら，意味や用法，教えるポイント，コツなどを研究しておくべきであると思われる。

最後に，中国の日本語教師には，中国語と日本語は全く違う言語であるという観念を初級段階から導入するように呼びかけたい。漢字文化圏の教師は，日中両言語における漢語の約３分の２が形や語義がほぼ同じであるため，詳しく説明しなくても学習者は大体理解できるだろうという先入観を持っている。一方，学習者は，漢字に関する基本的な知識の多くが母語としての漢字知識の中にすでに含まれており，改めて学習する必要のないものであると，過剰に自信を持っていることが多い。学習者に対して，既に持っている中国語の知識を全く使うな，考えるなと要求することは極めて困難であるが，日本語の漢語は日本語のものであり，中国語の漢字・漢語はあくまでも中国語のものだと常に意識させる必要がある。日本語の漢語の意味・用法をいい加減に推測するという態度を変えるためには，学習者が常に対応分類の概念を頭に置き，気軽に国語辞典やその他の辞書類を引いて活用できる能力や習慣を形成するための訓練を初級から始めていくという方法が考えられる。なぜなら，限られた授業時間の中で，充分に漢語の意味・用法などを教室の学習だけで与えることは不可能なことであり，学習者が未知の漢語に出会っても，自分で身につけていく力を育てなければならないからである。

中国人日本語学習者に対して漢語の適切な指導をおこなうためには，現場の教師と研究者との協力が必要となる。教師自身が日ごろから，日中両言語の漢語の違いや誤用などに目を向け，中国人日本語学習者がすでに知っていることを生かして日本語の漢語を正しく習得できるように指導するのはもちろんのこと，研究者が日中対照研究に関して，実際の現場において活用できるような資料を提供できるようにすることも非常に重要である。日中の同形語辞典の提案を試みた研究に大塚（1990）があるが，今後も日中両言語の対照研究および指導が活発に行なわれていくことを期待したい。勿論，漢字・漢語学習に対する教師および学習者の誤った態度を変化させていかなければ，これらの対応をいくら考えても無駄になってしまいかねない。

５．３　問題点および今後の課題

本研究は，質問紙調査を用いて中国人日本語学習者の漢語習得の実態を解明し，日本語教育の視点から学習者の持つ考え方を検討し，考察を進めてきたものである。ただし，それは筆者の学習経験から出発したささやかな試論であり，今後さらに量的にも質的にもデータを拡充していかなければならない。以下に未解決の問題点やさらに検討すべきところを今後の課題として概観する。

まず，同形語の分類についてである。今回の調査においては，先行研究の分類をふまえ，「語義」という観点から同形語を５つのタイプに分類したが，分類する際，依拠する辞書及び調査者の語義判断の基準が必ずしも同一ではなかったため，同じ語でも観点により異なるグループに分類されることが珍しくなかった。分類の際に，意味，用法，品詞性，共起関係の何をもって語義が広い，あるいは狭いとするか，不明な点が多かった。

つぎに，調査用紙の作成の問題についてである。調査１において，日本語と中国語における意味の違いということに重点をおいて問題を作成したために，結果的に問題にあげた漢語と回答としてあげた選択肢の漢語が同形語ではなくなってしまい，単に意味を問うものとなってしまった部分もあった。また，調査２においては，日本語の自然さ判断課題を中国語に訳す際，どうしても訳文の

感じが抜けず，自然に使われている中国語と比べるとやや不自然な感じが取れなかった。このことが判断に影響を与えた可能性もある。さらに，文中にある漢語以外の他の単語のレベルの調整を行なっていなかったため，学習者がターゲットである同形漢語以外の要因にとらわれてしまっていた可能性も考えなければならない。

また，全体的に中国語の文に対する適当な日本語訳を四つの選択肢の中から選ぶもの（中⇒日）より，日本語の文に対する適当な中国語訳を四つの選択肢から選ぶもの（日⇒中）の方が正答率が高いという結果になっていたが，その原因についてもさらに調べていく必要があると考えられる。最後に，調査1の被調査者151人には，「中国人日本語学習者の漢字・漢語学習に関するアンケート調査（調査3)」も同時に行ったが，調査1および2と関連づけて分析できるような形に予め質問項目を調整できなかったため，今回の調査結果の分析・考察には加えられなかった。これらを合わせて今後の課題としたい。

(付記)

本稿は，平成16年度筑波大学地域研究研究科修士論文のために収集したデータをもとに，加筆・修正してまとめたものである。指導教官の湯沢質幸先生をはじめ，副指導の加納千恵子先生，シュテファン・カイザー先生に心から感謝の意を表します。

参考文献

浅野百合子（1987)『教師用日本語教育ハンドブック⑤　語彙』国際交流基金　凡人社

淡島成高（1987年7月)「中国系日本語学習者に見られる漢語誤用例とその分析　その1」『麗澤大学紀要』44

淡島成高（1987年12月)「中国系日本語学習者に見られる漢語誤用例とその分析　その2」『麗澤大学紀要』44

石橋玲子（2002)『第2言語習得における第1言語の関与－日本語学習者の作文産出から－』風間書房

上野恵司・魯曉琨（1995）おぼえておきたい日中同形異義語300　光生館

大塚秀明（1990)「日中同形語について」『外国語教育論集』12　筑波大学外国語センター

武部良明（1979)「漢字国民に対する中級漢字教育」『日本語教育』37　日本語教育学会

田中敏・山際勇一郎（1989)『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版

玉岡賀津雄（1998)「漢字の認知処理における意味，書字，音韻的表象の構造と相互作用」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』社団法人日本語教育学会

陳毓敏（2003)「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について－同義語・類義語・異義語・脱落語の4タイプからの検討－」『平成14年度日本語教育学会秋季大会予稿集』社団法人日本語教育学会

長友和彦（1999)「第2言語としての日本語習得に関する総合研究」『平成8年度～平成10年度科

学研究費補助金研究成果報告書』基盤研究（A）課題番号　08308019
日本語教育学会編（1990）『日本語教育ハンドブック』　大修館書店
菱沼透（1980）「中国語と日本語の言語干渉－中国人学習者の誤用例－」『日本語教育』42　日本語教育学会
文化庁（1978）『－日本語教育研究資料－中国語と対応する漢語』　大蔵省印刷局
文化庁（1983）『－日本語教育研究資料－漢字音読語の日中対応』　大蔵省印刷局
三浦昭（1997）「日本語から中国に入った漢語の意味と用法」『日本語教育』53号　社団法人日本語教育学会
宮城幸枝（1992）「漢字指導についての一考察－漢字の音声とイメージという観点から－」『東海大学紀要　留学生教育センター』第12号
李愛華（2005）「中国人日本語学習者の漢語の意味習得－日中同形語を主として－」　筑波大学大学院地域研究研究科平成16年度修士論文

資料1：調査1用資料の一部

問題一：次の中国語の文に対する適当な日本語訳を選択肢の中から選んでください。

1．这个工作对我们公司非常重要。
　この仕事は私たちの会社にとってとても（A重要，B重視，C重大，D重点）です。

2．那个人头脑简单，像动物一样。
　彼は頭が（A単純，B簡単，C純粋，D単一）で，頭を使おうとしない。

3．医生精心给病人看病。
　お医者さんはは心を込めて患者を（A看病，B看護，C診察，D護理）する。

問題二：次の日本語の文に対する適当な中国語訳を選択肢の中から選んでください。

1．彼の父親は映画監督だ。
　他的父亲是电影（A监督，B导演，C主演，D监考）。

2．日本語演習は必修科目だ。
　日语（A演习，B训练，C研讨，D实习）是必修科目。

3．出世してからふるさとに帰るつもりだ。
　打算（A出世，B出息，C出生，D出头）之后再回老家。

資料２：調査２用資料の一部

問題三：次の文を一通り読んだ上で，下線のついた単語は自然～不自然の５段階の中においては，該当するところに○を付けてください。

項目内容	自然	やや自然	どちらとも言えない	やや不自然	不自然
仕事に愛情を持つスタッフを養成する。					
問題の性格がまだ十分つかめていない。					
古いノートを処分する。					

问题四：请判断划线词语在本句中是否自然。

	自然	有点不自然	不能确定	有点自然	自然
培养对工作充满爱情的员工。					
问题的性格还没有充分把握。					
处分一些陈旧的笔记。					